環境を生かした色選びと分節化による圧迫感の軽減 ～豊洲ベイサイドクロス～

大成建設㈱ 設計本部　渡邊 岳彦氏　勝（すぐる） 篤史氏　前田 有一氏

塗料・塗装３団体（（一社）日本塗料工業会、日本塗料商業組合、（一社）日本塗装工業会）で組織するグッド・ペインティング・カラー委員会が主催する「第25回グッド・ペインティング・カラー」の受賞作が、昨年12月に発表された。この賞は、塗料・塗装を用いた優秀なカラープラン作品による魅力的な都市景観の実現や、快適な環境への貢献を表彰するもので、今回の新築部門最優秀賞には、東京・豊洲駅前の大型複合施設「豊洲ベイサイドクロス」が選ばれた。

そこで編集部では、同施設の設計を手掛けた、大成建設㈱設計本部の渡邊岳彦氏、勝篤史氏、前田有一氏に、受賞施設の概要と色彩計画のポイント、さらには色や塗料、塗装への思いについて話を聞いた。

▲「豊洲ベイサイドクロス」の設計を手掛けた、大成建設㈱設計本部の、（奥から）勝篤史氏、渡邊岳彦氏、前田有一氏

東京湾沿い・豊洲駅前の大型プロジェクト

まず、この建物の概要についてお教えください ――

渡邊：「豊洲ベイサイドクロス」は、豊洲駅前に立地する、三井不動産とIHIが共同事業者として建てた建物です。周辺はIHIが石川島播磨重工業という社名だった頃の造船所跡地で、産業遺構も多く残っています。2002年に造船所が閉鎖されたあと、この「豊洲ベイサイドクロス」は当エリア最後の再開発プロジェクトとして、2020年10月に竣工しました。

建物は、Ａ棟にあたる「豊洲ベイサイドクロスタワー」と、Ｂ棟にあたる「SMBC豊洲ビル」の２棟構成で、その間にはエネルギーセンターが設けられています。Ａ棟は、低層階にショッピングセンター「ららぽーと豊洲」が入り、中層階はオフィス、頂部はホテルになっています。「ららぽーと」は、隣接する敷地にすでに店舗を構えており、この施設にも入ることで、規模が拡大した形になります。一方、Ｂ棟は、全体がオフィスです。

この区画は元々、駅前でありながらも空地だったということもあって、特に雨の日などは、「ららぽーと」へのアクセスが不便でした。また、街全体をフラットにつないでいくという点でも、駅前にあたるこの区画は、動線の起点、街づくりの起点となる場所ですので、再開発は重要な意味を持っていました。

そのため、計画は敷地の中だけに限らず、隣接する施設や豊洲公園につながる歩行者デッキを設け、人の回遊性を高める造りにしています。

また、場所の特性として、東京湾に面していながら、オフィスもあり、マンションもあり、ショッピングセンターもあり、近くには芝浦工業大学もあるなど、昼夜を問わず多様な人たちが訪れるエリアになっています。そうした特徴を考慮すると、今回はオフィスがメインの施設ですが、丸の内や大手町に見られるような、内外装石張りのいかにもオフィスビルというものではなく、賑わいや、多様な人々が出会う場をつくりたいという考えになりました。

課題は「圧迫感の低減」

渡邊：景観に係わることについては、海に面しており、目の前には豊洲公園もあるということで、景観条例の協議でも話が出たのですが、まず、海からの見え方が重要でした。現況の景観を守りながら、事業性も高めなければなりませんので、いかにボリュームを確保しつつ周辺への圧迫感を軽減できるかが大きなテーマになりました。

そこで、建物の配置として、海側のＢ棟を低くし、街側のＡ棟を高くすることで、海側の顔と都市側の顔をあえて分ける造りにしました。そして、Ｂ棟の外壁は曲面とし、ランダムに配置した庇によって変化をつけるなど、陰影のある柔らかな印象を与える意匠にしています。一方、都市側のＡ棟は、曲面を抑えてエッジの効いた「ビル」という立